

からばす



Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

第25号(2011年4月1日発行)

CONTENTS

p1 マリ訪問記

武蔵野赤十字病院 循環器科 尾林 徹

p3 現地活動報告

- 保健・病気予防活動 (p.3)
- 教育の普及・識字学習 (p.5)
- その他の事業の概要 (p.5)

p6 宮城学院、生徒さんたちの思い

p7 チャリティコンサート「かけはし2011」のお知らせ

p8 国内活動予定

マリ訪問記

武蔵野赤十字病院 循環器科 尾林 徹

私は新宿から20分ほどの東京西部の武蔵野市にある赤十字病院に勤めております。縁あってマリ共和国、CARAの村に数日滞在するというつい先日までは考えてもいなかった貴重な体験をさせていただきました。見たこと感じたことこれからのことなど個人的な体験談を述べさせていただきます。仕事の性質上夜は遅くなることも多く、終電を気にするよりはと車通勤をしています。病院からの帰りには近くの駐車場から家まで2分の家路につきます。夜空を見上げると今夜も冬の星座がよく見えます。“オリオン”のリゲルとベテルギウス、シリウスにプロキオン、アルデバランに“すばる”、北の空には“カシオペア”、“北斗七星”と今年は夜空が澄んでいて一等星が見えていますが、夜空を見上げているとマリの村で村上さんの話を聞きながら一緒に見上げた満天の星空が鮮明に思い出されます。



尾林先生とカラ運転手のセイドウ

昨年のクリスマスシーズンを挟んで8日間の日程でマリを訪問しました。リタイアしてからでは遅いと村上さんに言われたので、少し焦りながら、今行かなければ次のチャンスは無いだろうと、あまり考えずに急遽マリ行きを決めました。が、そこからが大変でした。村上さんからは行き届いたオリエンテーションをいただきましたが、西アフリカの案内書はありましたが、マリへの詳しい旅行案内など皆無で唯一村上さんから頂いた市内の観光地図のみでした。(英文ですが、Bradt Travel Guide Ltd. UK出版の“Mali” Michael Palin 著があります。)海外の経験といっても旅行代理店任せの学会参加がほとんどです。代理店に丸投げで頼めるわけもなく大丈夫なのだろうかと思いつつ、マリ共和国の在日大使館のHPを参照してビザ取得と黄熱病の予防接種など必要な手続きを出発から逆算して日程を決めるところから準備が始まりました。

行きはパリで一泊が良いとのお薦めでした。日本からマリのバマコ国際空港へは単純にエールフランスでパリ経由が良いだろうとシャルルドゴール空港(CDG)の近くにホテルを確保しました。拡張されたCDGは初めてで、昔の記憶は全く役に立ちません。土地観ゼロでの選択です。旅慣れた人には造作ないことなのでしょうけれども、若い時に“深夜特急”未体験のおじさんには相当ストレスフルな作業です。最近のフライト予約はネットで座席まで事前確定できますが、ボーディングパスに相当するのが、パソコンでプリントアウトしたペラペラの紙一枚のみでとても不安でした。国内線でも同様なので大丈夫、と思っはいても、CDGで不慣れた英語で交渉する事になったらなどと考えると胃に穴が開きそうでした。何よりも心強かったのはバマコのホテル手配は村上さん任せだったので、バマコまで到着すれば後はなんとかなるだろうということでした。というわけで、快晴の成田から雪のバリ経由で、気温30度のバマコ国際空港に現地23時近くに無事到着と相成りました。入国審査後にタクシー乗車の押売りを断り切れずにいたところ、目の前にスカート姿の村上さんが立っておられました。「本当に来ましたね。」と記憶していますが、私も「来てしまいました、、、」と答えました。

村上さんの成田からの未着の荷物をAM1時近くまで待ちましたがやはり届いておらず、その間空港の駐車場で待ちニコニコと迎えてくれたのがセイドウさん(私にはセドゥと聞こえました)でした。トヨタの4駆でニジュール川を渡り市内のホテルまで送り届けてもらいました。ホテルも村でも心配していたネットイシマカなどは滞在中を通じてほとんどいませんでした。初日から安眠熟睡の毎日でした。(次ページへ)

さて、翌日夕食に誘っていただいて、市内の中華レストランで大きな春巻きを食べ、ジャスミン茶を飲みながら、今に至るカラの活動や村のことなどお話を伺いました。先入観を持たずに現地を視察したかったといえば聞こえは良いですが、実のところ、何とかなるだろう精神で下調べもせずにいきなりやって来てしまったわけです。医療の現場にいて感じることは、ボランティア精神がいかに大切かということです。いかに欠けているとも言えます。身の回り、自身のことに精一杯の毎日で、医療の原点は何であったのかを忘れてしまいそうです。シュバイツァー博士の「水と原生林の間で」を昔読んだことを思い出し、その原点ともいえる西アフリカ(ランバレネでなくともその近くには)に一度行かねばと常々思っていたことが今回マリ行きを決心した理由でもありました。村上さんの”視察にどうですか”に、背中をひと押しされてしまいました。とは言え、何か役に立てることが本当にあるのだろうかとは、東京を発つときから思い続けていました。

その翌日は地区の診療所に向かいました。Dr、看護師、助産婦さんなど多数の人と会い、熱帯熱マラリア患者が点滴されている病室を訪れたり、出産直後のお母さんに会ったり、AIDS(SIDA)も多く、感染症の予防接種が大切な仕事であり、他にUNICEFのビタミン入りゼリーが提供されていることなども興味深く見せてもらいました。昼はジャワラお父さんとご一緒させていただきONG CARA事務所でパームオイルとピーナツオイルで煮込んだビーフシチュー風味の昼食をいただきました。庭でとれたオレンジとリンゴ(輸入品?)がデザートです。食事は自然に馴染める味付けでした。現地で古くから植林に携わっている小島さんのお宅にもお邪魔して、庭の苗木を見せていただき、サハラ砂漠のトイレの話などを面白く聞かせていただきました。ニジュール川のほとりに聳えるLYBYA HOTEL(Gadhafi一族の経営)や中国有限公司の建設中の建物などを見ながら帰途に着きました。滞在中にコートジボアールの政情不安定が報道されましたが、チュニジア、エジプト、リビアの現在の政情は想像もできません。わずかに二カ月前のことです。海外での特にフランス語圏でのニュースソースはCNNやBBCに頼らざるを得ませんが、国内にいと全く分からないことが多々あることを今回の経験で強く感じました。日本人は外に出ていけないといけませんね。ホテルでもまず、Chineseか?次はKoreanか?と聞かれました。Japaneseは分かってもらえますが3番目でした。

翌々朝、村に向かいました。丁度朝の通勤時間と重なりバマコ市民の生活を車内から見ながら、市内を抜けてニジュール川を右手にクリコロに向かいました。後からGoogleEarthで大体のところは迎いましたが、滞在する村に向かっていることしか知らずの全くなのお任せの旅でした。クリコロからは、アフリカのサバンナなのですが、西部劇に出てくるテキサスカサンディエゴ郊外といった感じの景色でした。クリコロ(Koulikoro)を抜けて北東に向かい次いでシラコロラ(Sirakorola)で右(南)に曲がると舗装路は無くなり大いに揺れましたが車酔いもせず300km 弱4時間余の後、途中、ケイタさんのお家で昼食とティーで歓待され、バンバラ?(Bambara)の村の市場と授業中の小学校と女性農園に立ち寄り、CARAの宿舎、村に到着です。マンゴーの木を見たのも、パパイヤの木を見たのも、たわわに実をつけたバオバブの大木を見たのも初めてでした。村上さんのガイド付きのおかげで俄かに知識が豊富になり、また、セイドゥさんと村上さんのバンバラ語での会話も内容は分かりませんが、とても心地よい響きでした。清潔な建物の宿舎は周囲に広々とした草地が広がりユーカリの木が整然と並んで木陰を作っており、遠くにマンゴーの大木が数本望まれ、ロバがのんびりと歩いています。まさにユートピアでした。

いよいよ現地視察が始まります。村の人々と宿舎の生活、お母さんたちの母子保健教室、栄養教室、村の助産所と保健所、小学校の建設予定地、村長さん宅訪問、工夫に満ちた改良台所、手汲み式の井戸、農園とパパイヤ、トウガラシ、レモングラス、満月の夜の識字教室、満天の星空、地平線から昇る満月、日没後の人工衛星、遠くから聞こえてくるパラフォンと太鼓の音、、、サッカー大会、キャッチボール、病みつきになりそうな食後のティー、などなど。

そしてこれから何ができるのか、何をすべきか、村上さんが揺るぎ無いレールを敷いていますので、レールを曲げてしまうのではないかとこの恐れもあり、次を考えるのがとても困難です。

旅行記までで紙数が尽きてしまいました。核心については、また次の機会にといたします。単にお邪魔をただけの粋狂な者にこのようなチャンスを与えて下さり終日お付き合いただいた村上さんには心から感謝申し上げます。10年以上にわたり現地の人々に尽くされてきたボランティア精神の持続とその行動力に、心から敬意を表します。頂いたものが多すぎて、宿題とと思っていますけど、どうやって回答をお返ししたものか思案の毎日です。“イ・ニー・チェ”



サッカー大会で子供たちと

現地活動報告

2010年11月～2011年3月

2010年12月から2011年1月にかけて現地を視察してきました。いつもの年と違って肌寒い毎日でした。コナナ村の4haの造成地にはカシューナッツの花が満開でした。現在この造成林は経済的な面でもコナナ村の人々を助けています。それは、ここから収穫・販売された果樹の収入が穀物銀行用の資金、もしくは深井戸の修理費等に有効に利用され役に立っているのです。

そしてこの期間、村の人たちは非常に多忙でした。理由は、2010年の雨季が例年より長く続いた結果、予想よりも多くの穀物の収穫がありそれに日時を費やしたためです。

近年は、雨季に主食の唐人ヒエの作付けだけでなく、ゴマを栽培する人が多くなりました。ゴマは、確実に商人が買い入れてくれるためです。一方、クリコロ町に建設されたジャトロファを原料とする製油工場では、村人にボランティアでジャトロファの栽培を奨励していますが、これには、31ヶ村中たった一人だけの参加です。これは、ジャトロファが商品として売れるまでには数年が必要ですが、これに比べてゴマは数ヶ月で商品になります。そしてゴマの方が栽培が簡単ということで人気があり、多くの主婦が栽培しています。このために唐人ヒエの収穫が終わっても多忙で、昨年までのように直ぐにカラの活動に入るということは出来なくなっています。

ゴマはピーナツのようにソースに入れるととても美味しいことを説明したら、それをトライした主婦がいて美味しいと評判になり、これからは販売するだけでなく調理に取り入れられつつあります。

このようなことで、いつも10月から始まっている乾季のカラの活動の開始が1ヶ月以上も遅れました。

保健・病気予防活動

2008年10月から3年間(2011年9月まで)の期限付きで始まったこの事業も後半に入り、各村5人の女性によるKMT(ケネヤムソートン・健康改善女性のグループ)の後半グループの16ヶ村のKMTの研修会が始まりました。

この研修は、数ヶ村のKMTがひとつのグループになり、スタッフのアワが保健コーディネーターとして指導をします。講師のアワの他に6人のカラのアシスタントスタッフも今までの研修会をアシストした結果、研修内容を習得し、代講をすることが出来るようになりました。しかしこの研修会は、今期は当初の計画のように進めることが出来ませんでした。それは、2010年の雨季が長かったために、乾季になっても道のぬかるみ状態が続き、研修会を予定していた村への出入りが不可能でした。そのため多少の計画が変更され、道がよくなり足の便のいい村から研修会が始まりました。

2011年1月になってやっと、計画通りに研修会が開かれ、1～3月中に全グループが終了しました。1グループの研修会は13日間です。この研修会は女性たちは頭で記憶するのですから、同じ事を何度となく繰り返し講義され、反復します。字で覚えるものではありませんから紙芝居的な教材も使われ、特に効果のあるのがビデオの映写です。研修会終了後は、KMTの出身村で村民への報告と、村民会議が開かれその後の村での活動計画が協議されます。そして村民合議の上、KMTの指導による啓発学習と公共場所の清掃の日程が決められ、それにしたがって村全体が活動に取り組むこととなります。

これらすべてにオブザーバーとして参加するカラのスタッフは非常に多忙でした。

2011年3月末に、計画通り31ヶ村にメンバー5人のKMTが組織されました。4月からは、各村ではKMTがリーダーになり学習会を行い、知識を人々に広め、村の清掃も行い、清潔で病気のない村を築くよう働きます。村の女性たちの力が発揮されます。

(次ページに続く)

2010年12月にカラの現地へ来られ、今号に紀行文を書いてくださった尾林先生がタイミングよく開催されていたキヤン村とバラバン村のKMT10人の研修会を視察していただき、栄養の面について適切なお意見をいただき、参考になりました。

この時の研修会ではキヤン村の男性識字教師からのたつての希望で、研修会へボランティア参加をして女性たちと一緒に学んでいるのが印象的でした。

既に述べましたように31ヶ村にKMTが組織されてすべて研修は終わりましたが、一番最初に研修を終えた村のKMTはすでに1年以上も経過し、自分たちの村で人々への知識普及を続けています。その結果がどのようにになっているか知ることは、非常に重要でまた興味のあることですが、私たちの目にはっきり見える変化ないように感じますが、今までは自宅出産が多く出産事故も数え切れない程でしたが、地域に助産師が増えたので自宅出産が非常に減少し、事故も殆ど見られなくなったこと、そして男性は耳を傾けなかった家族計画についても、これを考えるカップルが産院に相談に来るようになったこと等から考えて、人々の意識が変わっていることは確かです。しかし、このような村での学習会にも問題があります。それは男性の参加が少ないことです。これは今後の課題として、男性の参加を促す為の何らかの工夫が必要です。

反面、各村の事情も知ることが出来ました。村で禁句になっている話、古くからの言い伝えで妊婦が通ることの出来ない道があり、そこを通ると死産する、と言われていたので産院のある村へ行くことが出来ないなど、多くの問題を知りました。これらも無視できませんから今後考えるべきことです。

この3年間の事業で私たちは6人の助産師を育成する予定でしたが、2011年までには3人の助産師を育成しただけで、文字を知らない女性が殆どのために、出産や母子衛生の改善や普及も困難と半ばあきらめています。今後もこのような保健事業にはしばらくの間フォローアップが必要ですから、村の人たちと付き合いながら、助産師をこの地域に増やすために才能ある女性を見出し、育成することを考えています。過去よりも多くの少女たちが中学校にも通学するようになりましたから、高等学校にも進学する少女も出てくると思います。そして才能のある女性が見つかったら、村と家族の了承を得て、1年間の研修を受けるようバマコの診療所へ研修に送り出すことを考えています。

育成後には助産師として村の女性たちの為に働き、日本の出産事情とは雲泥の差があり、常に死と向き合っている出産状況から脱却できるように支援していきたいと思えます。助産師育成後には、女性が安心して出産が出来て、乳幼児の死亡をゼロにするよう学び、村の人たちが運営管理できる範囲の産院を建設したいと思っています。カラの事業のうちでも、利益が金銭で直ぐに現れない保健事業の成果を見ることは非常に困難です。事業を継続する側の忍耐と工夫が必要であることを強く思い知らされています。

現在ヌムブグ村に産院を建設中です、この産院は3月末にはバマコの病院で研修を受けた新しい助産師が村へ帰り、村の人々のために働きます。昨年建設したカチョラ村産院同様に開設後1年間は助産師の給料はカラで支給しますが、その後はすべて村の人たちが努力して運営するように指導しています。このようなことが可能でない村には、産院は建設しないことにしています。

このヌムブグ村の村長は、他の村と違い30歳代で非常に若いのですが、村人から強い信頼を得ています。カラが依頼した事はすべて予定とおりに進めています。このような村長の村ですから彼の指揮の下、産院は順調に運営管理されていくと期待しています。



キヤン村KMT学習風景



教育の普及・識字学習

この事業も、バブグ地域を含む約88ヶ村で毎晩識字学習を続けています。毎回ご報告しておりますように、識字教室へ来て学ぶ人は女性が60%で圧倒的に多いです。

村の人たちは、識字教室で年間4・5ヶ月しか学んでいません。今期は新しい識字教室がバラバン村に建設されました。これは、カラの活動を理解して下さる方からのご寄付によるものです。この教室も計画より1ヶ月半遅れて建設されました。やはり農作業が長引いたのが原因です。村の人たちは農作業が終わって休む暇もなく、すぐに土レンガづくりからスタートし、3月に完成しました。

成人が多く集まる識字学習は主に夜間に利用されますが、現在、小学校への就学率が上がって来て、今迄カラが建設した識字教室が昼間には小学校として利用している村があります。識字教室として建設した6×8mの狭い教室ではキツキツですが、2学年が学んでいます。

高学年が誕生したら、村で土レンガで教室を建設して間に合わせるそうです。雨季の降雨で破壊されることは確かですが、鉄筋での建設は村の資金では不可能ですから、当分は村で補修する様になると思います。教育の普及の重要性を認識し始めたのでしょう。しかし、教室や教師の不足が大きな問題です。学校側は、新一年生は2年に一度の割合で募集しています。教師は2学年を一人の教師が受け持っているのがここでは普通です。

マリ共和国も中学校まで義務教育制とはいえ、日本のようではありません。このような状況ですから、カラへ小学校建設の要請が非常に多くありますが、応じきれない状況です。写真のように、ゲレフォガ村識字教室は小学生に利用されています。



教師の質問に手を上げて答える子供達



その他の事業の概要

野菜栽培では、耕作期になると女性委員会は会議を開いて新しい種子を購入して、野菜栽培を始めています。育苗技術も上手くなりました。女性適正技術の活動も、技術を知ることが収入を得る道へ直接つながることを確実に知って来ましたから、カラのスタッフの指導がなくても作業を続けることができます。

女性の貸付事業においては、すでに9年も継続しているモバ村やコニナ村では、100人前後の女性たちが参加しています。5ヶ月ごとの決算も、アシスタントスタッフの立会いで女性委員会で行っています。この2ヶ村の女性たちからは、ここで一端資金を分配したいという意見が出ています。この基金を個人に分けてしまいたいのです。カラは、女性に必要な産院の資金とか、穀物銀行や穀物製粉機のために使用するというアイデアを出しましたが、賛同してくれません。

しかし、このモバ村やコニナ村の女性たちの考えに反して、貸付規模の小さいママブグ村の女性たちは、もっと資金を増やして小学校と産院建設の資金にしたいと言います。女性たちの資金で建設することはとてもかなわぬことですが、みんなの為になることを考えています。そして、この村の女性たちに貸付事業の成果を聞くと、遠い村の小学校へ子供を通わせているからその昼食(村のブティックでビスケットを買ってお昼ごはんにする)代として100cfa(15円)持たせることが出来るようになったと、心から喜び満足しているようでした。そのような母親の言葉や姿を見ると、私たちの毎日の生活が反省させられ、涙が出る思いで、更に確実な支援を、と考えさせられます。この村の女性たちは他の村と比べても協力的です。このような女性たちの考えに村のカラーが良く現れているようです。

自然環境保護に働く森林パトロールの巡回が功を奏したのか、この乾季にはまだ森林火災が発生しませんでした。ローカル種の植栽を希望する村も少しづつ増えてきました。活動の意義が人々に理解されてきたようです。

宮城学院、生徒さんたちの思い

宮城学院では毎年開催される文化祭のバザー収益を、カラに寄付して下さっています。既に7年間のご支援をいただいています。昨年の文化祭は【124年の歴史と私たちの挑戦】をテーマに行なわれました。それに先立ち、高校執行部の牧野佳奈恵さん(当時高3)がマリ共和国への支援が持つ意味について、礼拝でお話くださったとのこと。今回は一部抜粋ですが、皆様にご紹介いたします。(『宮城学院中2だより 第15号』～2010年7月16日発行～より)

『夏休み明けに迎える文化祭を前に、中学校・高校が長い間続けてきたマリ共和国への支援について、お話ししたいと思います。毎年行っているバザーではありますが、中学校と高校が一丸となって取り組むためにも情報をしっかりと共有してバザー作品をつくる時やお店をつくりあげる時の参考にさせていただけたら嬉しいです。

宮城学院がカラを通してマリ共和国を支援するようになったきっかけは、2004年度、今から6年前の文化祭です。当時高校2年生だった私たちの先輩が英語の授業でカラの活動ぶりや一人で活動を始めた村上一枝さんの思いについて学び、村上さんの言葉に深く感銘を受け、心を動かされたそうです。その言葉は、教科書にあった、「隣人の家が火事になった時、あなたは助けませんか?」というものでした。そして、「勉強して終わりではなく、自分たちも何か役に立てないか」という声とともにこの活動が始まりました。以後文化祭でのバザーは例年引き継がれ、2006年度には現地のマリ共和国に「識字学校」が建てられるまでになりました。先輩方のこの活動から、私は、心に感じたものを他の人と共有し、そしてそれを実際に一つの行動へ移すという事が可能なのだと知りました。また、欲張らずに“一人一作品”と決め、積み重ねの大きさを大切にしたい先輩方もすごいなと感じます。

昨年度は、私も参加し、学年全体で協力して“We are the world”というバザーのお店をつくりました。ほとんどの人

が心をこめて丁寧に作ってきてくれ、自分の利益にはならないのに、快く協力してくれる皆を見て、そんな宮城学院を誇らしく思いました。いらなくなったものをただ持ち寄るのではなく、遠く離れた、困っている人のことを考えて、心をこめること、これが大切な支援であり、先輩たちが伝えたかったことなのではないかと思えます。先輩方からの伝統を大切に守り、継続していくとともに、状況に応じた臨機応変な活動をしていかなければならないという意味で、私たちは少し大変な時期にいるのかもしれませんが。しかし全校生徒・先生方・ご来校の方々の小さな力を大きな一つにして着実な支援ができたと思います。一人一人がマリ共和国の一人一人の事を考えて、自分の意思で行動に反映させて行けたら、こんなに素晴らしいことはないと思いますし、私たち自身の力にもなっていくと思います。この宮城学院は124年前、社会環境が貧しく女子は教育を受けなくてもよいという時代に、アメリカ人の支援によって生まれました。勇気をもって、この学校が立ち上がったから120年以上が経過し、その歴史は他のどの学校より古くて長いものになっています。そしてこのバザーは、「神を畏れ、隣人を愛する」というスクールモットーのもと、毎月学校生活を送っている私たちが“隣人を愛すること”を実現するチャンスです。夏休み明けの提出に向けて、遠く離れた人のことを思いながら、心のこもった作品を作りましょう。

高3の私が宮城学院の高校生として、この学校にいられるのはあと数ヶ月です。卒業というゴールが見えてきた今、中学校の時のことを思い出します。あの時は今よりさらに自分のことで精一杯で、まわりの環境に目を向ける余裕はありませんでした。今振り返ると、本当にもったいない事だったと思います。宮城学院は、自分から手を伸ばせば、いろいろな事を吸収でき、先生方や友人たちが心から応援し支えてくれる、そんな環境もあります。ぜひ皆さんは、マリ共和国への支援を始めた先輩方のように一致団結して、一つ一つの事に取り組んでいって下さい。卒業する時に、宮城学院に入って、この仲間と出会えて良かったと思えるように毎日を過ごして下さい。その事がバザーや文化祭の成功につながると思います。共に頑張りましょう。』

トウグニ地域井戸設置基金にご協力お願いいたします。

カラは2000年から、旧バグ地域から現在のトウグニ地域へ活動拠点を移し10年以上が経過しました。常にカラの会員の方々を始め、多くの方からのご理解、ご支援をいただきながら、現地の人たちと継続している活動は、彼らの意識の改善を含め日常生活に多くの変化が見られてきました。そして、ある種の活動は住民に委ねることが出来るようになりました。村出身のアシスタントスタッフ6人もカラのスタッフに代わり人々へ指導できるようになりました。これらは、日本からのご支援の成果と考えスタッフ一同深く感謝いたしております。

しかし、活動を進めるに当たってまだ多くの不十分な点がござります。今回「カラバス25号」紙上でご協力をお願い致しますのは、まだまだこの地域に清潔な水の無い村が多くあり、現在進行中の病気予防・衛生知識改善事業に於いても、意識は改善されつつあるものの、肝心の清潔な水が村にない為に活動が足止め状況になっている村があります。健康な人々の生活を築く手段として、皆さまからのご支援を頂き、深井戸(手押しポンプで地下水脈から水を汲み上げる井戸)を設置したいと思います。ある村では手堀の井戸一基だけしかなく、日常の生活用水と、群がってくる家畜用の飲用水に使用され、決して清潔ではありません。特に乾季には井戸が涸れる為に6km程離れた村へ水を貰いに行く状況です。写真でご紹介致しますような深井戸一基の設置には、130万円前後の費用が必要です。

現地の人々の生活を ご推察いただき、皆さまの暖かいご支援を是非にお願いいたします。



設置予定と同型の手押しポンプ付き深井戸

CARA CONCERT カラ チャリティー コンサート「かけはし2011」 12/8(木)午後 @銀座・ヤマハホール

カラでは、マリ共和国の農村の女性と子どもたちの健康と幸せな生活を祈り、シャンソン歌手の原田康子さんにご協力をいただき、毎年チャリティーコンサートを行なっております。

昨年も、おなじみの並木健司さん、中上香代子さん、佐藤英樹さんにバンドをお願いし、素敵な歌声と共に忙しい年末のひと時にホッと時間を過ごさせていただきました。当日は多くの方がお越し下さり、本当にありがとうございました。

その折に代表が、「次回【かけはし2011】は原田さんにご協力をいただいて10年目になりますので、記念として、いつもと違う企画を考えている」と申し上げました。また毎回コンサートが大盛況で入場をお断りしている状況でもありますので、2011年は素晴らしく改装された銀座・ヤマハホールで、12/8(木)午後開催することとしました。当日は、時節柄クリスマスイルミネーションに彩られた華やかな銀座にお出かけ下さり、コンサートをお楽しみいただきたいと思えます。

みなさま、お誘い合わせのうえ、ご来場くださいますようお願いいたします。

なお、入場券予約は10月頃からと考えております。HPでご確認、またはカラ事務局(0422-29-7640)までお問い合わせください。



国内活動

- 11/7 【第30回 むさしの青空市】に参加・活動紹介 武蔵野市民公園
- 11/26 日本女子大学【2010年度桜楓会バザー】に参加・活動紹介 日本女子大学
- 12/12 カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2010】 銀座・十字屋
- 1/31 積水樹脂(株) 産業・生活事業本部にて活動説明 滋賀・蒲生郡

<2011年4月以降の予定>*変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください

- 4/29 東京女子大学【園遊会バザー】で活動紹介 東京女子大学
- 5/15 【東京白梅会】で活動紹介 中野サンブラザ
- 6/15・16 【アフリカン・フェスタ2011】 横浜・赤レンガ倉庫イベント広場
- 6/21 盛岡二高文化講演会にて講話 岩手県立盛岡第二高等学校
- 6/22 【WFF 20周年、ILCA 25周年記念交流会】にて講演 霊南坂教会
※上記講演会にはどなたでもご参加出来ますのでカラ事務局までお尋ね下さい
- 7/中旬 【2011せんだい地球フェスタ】 仙台国際センター
- 9/下旬 【パネルディスカッション】 龍谷大学アバンティ響都ホール(京都・アバンティ内)
*参加:龍谷大学学生有志、マンスール・ジャーニュ、緑のサヘル、カラ
- 9/下旬 【緑のサヘル・カラ合同JICA事業報告会】 JICA兵庫
- 9/下旬 【第21回 三鷹国際交流フェスティバル MISHOP WORLD 2010】 井の頭恩賜公園・西園
- 10/下旬 【日本 中近東 アフリカ婦人会主催 第16回チャリティーバザー】 ロイヤルパークホテル
- 11/月上旬 【第31回 むさしの青空市】 武蔵野市民公園
- 11/下旬 日本女子大学【2011年度桜楓会バザー】 日本女子大学
- 12/8 カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2011】 銀座・YAMAHAホール

からばす(Calebasse)-第25号- 2011年4月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589